

## 追憶

逆縁という言葉がある。仏・菩薩に反抗したり、仏法を謗ることが、かえって仏道に入る因縁となる、というのが原義だそうである。それはそれとして深遠な意味を含んでいるように思われる。これが転じて、親が自分に先立った子のためにする供養にも、さらに、必ずしも親子の間柄でなくても、年長者が年少者のためにする供養にもいうようになる。私は、わが子のために供養する悲運にはまだ逢っていないが、いわゆる教え子（こういう言い方を、教師である自分からするのを私は好まないが、これに代る簡単な用語が見つからないので、ゆるしてもらおう）や、年少の友のたれかれの死を弔ったり、またその追悼文を綴ったりしたことが、これまで何回あっただろうか。そういう意味の逆縁の悲しみを、それこそ数え切れぬほど味わってきたような気がする。

憶

若い人の死を見送る席につらなって、読経の声を聞きながら、私は何物へとも知れず、無性に怒りをぶちまけたい気持ちに駆られるのだった。翻って、老来なお便々と生きながらえる自分とは何か、と自問してもみるのだった。昨年六月二十一日午後三時過ぎに、三十七歳を一期として逝

追

った若岡義久君の場合にも、私は同じ体験を味わった。幼い愛児二人と、若い夫人を残して、さぞ無念だったろうと、その心事を想察して、今でもひとり涙することがある。若岡君が最期の息を引き取った太田外科は、舟入南四丁目にあった。発病して最初の診察を受けたのもこの病院だった。それから中電病院で手術を受けたのであるが、その後一時快方に向かい、勤務先の比治山女子高校の教壇にも立てるぐらいになった。むろん病気が病気だったために、根治したわけではなかった。奇蹟を祈る思いは強かったが、今にして思えば、それはどうしようもないことだったのだ。その間の長い闘病生活を通して、本人の苦痛はいうまでもないが、御家族、とりわけ夫人の心身の労苦は、筆舌につくせぬものがあつたと想像する。昼間生徒と相對している時は、不思議に苦痛を忘れてゐるが、夜寢床に入つてからの病苦との孤独な闘いは、何とも堪えられぬ、と語つたことがある。その頃から私は、若岡君が、何か宗教的な心の拠り所のようなものを自得してきたのではないか、と思うようになった。

再度入院を必要とする容態となつた時、自分で太田外科を選んだと聞いた。見舞にゆくと、健康時と変らぬ大声で、力強く話しかけるので、重病人であることを忘れて、ついその話に引き込まれてしまふのだった。

亡くなる二日前、母堂から病状が悪化したとの報を受け、急いで出かけた時は、ちょうど麻酔の注射が切れて、眼を覚した所だったが、私を見るなり、合掌して、何か言いたげな様子をした。衰弱は蔽うべくもなかったが、安らかな笑顔が、逆に私の不安をやわらげた。私は、彼と固く手

を握り合つて、言葉少なに辞去した。その手はかさかさに乾いていたが、力強いあたたかみが、私の掌に伝わってきた。

あとで夫人から聞いた話であるが、私が最後に見舞つた日の数日前に、比治山女子高校の国信校長が見舞にゆかれたそうである。その時、信心深い同校長が、最期の覚悟にふれた話をされるのを、一心に聴いていたが、そのあとでひどく喜んでいたという。臨終には居合わせなかつたが、静かな往生だつたにちがいないと、私は信じている。それがせめてもの心やりである。

若岡君は、昭和三十六年卒業以来一貫して比治山女子高校の国語教育に打ち込んできたが、四十一年に比治山女子短大が創設され、その翌年から私もそこに勤務するようになった。高校で若岡君の教えを受けた学生を、短大で私が受持つという巡り合わせなのである。その学生の上に、若岡君のすばらしい教育の影響が認められるのに気づかされることも一再ではなかつた。学生を通して、彼の教育の実態が推測されるということは、何よりも、彼が教師として本物であつた証左である。広島大学の卒業論文は、「嘉村磯多論」であつたが、彼の資質がそこに存分に発揮されていたという印象は、今も鮮烈である。あの時見せたと同じ探究の姿勢で、日々の国語教育に打ち込んでいるにちがいないと思つたことである。

追憶  
そろそろ一周忌がめぐつてくるが、彼の死を哀惜する思いは募るばかりである。ただ、二人の愛児——忍くんとゆうちゃんもすくすくと育っているし、夫人も母堂も令弟も揃つて元気でいられるのを、せめてものこととせねばなるまい。